

## 村研の「村長」であつた頃

村長 利根朗

この奇態な標題は私がえらんだのではない。去る秋の村研の大会で、あらたに事務局を引きうけた大学の誰かが、会場のロビーでココロでも飲みながらふと思いついた、というのが事のいきさつらしい。その誰かも、この「村研の村長さん」のいわれを目撃していたわけではない。当時まだ中学生ぐらいであつたはずだから。村研の第一回大会は一九五三年の秋に、東北大学の農学研究所の講堂で開かれた。その研究発表のさ中、舞台の袖に「村研の村長さんおいででしたから受け付けまでおいで下さい」と差紙が出た。昨今はそのいうことをしないが、まずいことにその時は最前列近くで熱心に発表を聴いていた。満座の視線を浴びて、と思ひながら下うつむいて玄関に出ると友人の工学部の助手が、学割を貸してくれという。会が果て何人かが農学研究所の菅野俊作さんの部屋へ流れこんだ。有賀喜左衛門先生が傍の誰かに「村研のソントウウさんとは何のことかね」とたずねていた。有賀さんの方が村研の「村長」さんにふさわしい風貌であつた。そういうわけで、「村研の村長であつた頃」というのは会の創立当時を指すというのが編輯者のつもりらしい。たしかに村研創立からの会員ではあるのだがたいした自覚をもつて会員になつたわけでもない。どういう趣旨で村研が作られたのかも知らなかつた。私はその春卒業したばかりであつたが、その二年ほど前から中村吉治先生を中心とする南部藩煙山村の研究が始つて

いた。私も文字どおり諸先生にくつついて幾度か煙山村に行つていたから、村落を研究するのは至極当然と無意識のうちに会員になつてしまつていた。当時、一方では学生が農村に入つてゆくことがはやつていた。農村は解放されたが農村に封建制は本質的には残つてゐるという発想から、戦後の農村に共同体をみつつけようとしたわけである。こちらの方はその後の政変で、農村に共同体はなくてもいいことになつてしまつたが、村研の方はそんなこととはかかわりなくその後二〇年余つがなく成長して来た。私の村落への関心も持続している。煙山村の研究を通じて教えられた村落研究の方法が当時から一貫して私の村落にたいする見方を支配している。共同体を見ようということである。

土地を所有しみずから鋤を振る農家の、直接の、商品交換を媒介としない、生産や生活のための社会関係が村という農民の繫りになる。農業従事者が集住しているということだけでは村と呼ぶかいはない。一昨年の村研大会の時に、ネムの郷で暮夜散歩しながら、近代社会で村落を問題にするのはもともととおかしなことだと、呟いたら、現実には村があるではないか、と言下に一蹴されてしまった。日本の近代社会に「村」があつて政治的にも経済的にもいろいろ意味をもっていることはまぎれもないことだが、村研がその「村」を追求しているとは必ずしも思えぬふしがある。完全に自立した後の小生産者の集団やその分解のことは村研本来の課題ではなからう。近代社会で「村」を分析しようとするれば、多かれ少かれ前近代的な要素、家の共同体としての結びつきを捉えることにある。それには

歴史的視点が必要になる。前近代社会に興味があつて村研に出て来る者と、現代社会に主要な関心があつて現存する「村」を分析しようとする者が、どこかで交流できるのでないかと村研の意義は失われる。農業を対象とするのだから村落社会研究会でいいというものではない。もっとも、歴史学の方でも、村落構造というと土地所有の階層構成であつたり、共同体と制度化された行政区画と区別しなかつたりするからあまりあてにも出来ないが、村研では農業経済学やただの社会学だけでは解けない、家の村落的・共同体的結合の謎をなるべく多く俎上に上げられるようにしてほしい。そんなことはわかつてしまったから課題は更に先にすすんでいるのだ、という状況にはまだ達していないと思う。村研の創成期に、村それ自体の探究の意気込みが強かつた。村研が単なる地域社会一般を研究するだけなら、村長もいらなくなる。この小文の結末を、「私は村研の町長にはなれない」としたらどうか、と親切なアドバイスをしてくれた人もいる。